

浦幌で採集された蝶

円子紳一

1. はじめに

『浦幌町郷土博物館報告』第6号で、浦幌中学校元教諭松本尚志が「浦幌町に於ける蝶類の分布」と題して、浦幌町産蝶類77種を解説している。また、その際に上士幌、陸別、足寄、本別の各町の記録を「十勝管内隣接町村蝶類分布表」として掲載している。(『本報告』第7号で15種23例、浦幌産はカラフトタカネキマダラセセリ1種を追加している。)

『本報告』第6号は1975年1月の発行で、それから7年近く過ぎ、その間に浦幌未記録種の発見も数例あり、新たに池田町と芽室町の記録も手にすることことができたので、今一度まとめてみた。

なお、参考に資するため、釧路管内の記録も付した。

この結果、浦幌ではセセリチョウ科9種、アゲハチョウ科6種、シロチョウ科8種、タテハチョウ科27種、シジミチョウ科28種、ジャノメチョウ科9種、マダラチョウ科1種の、合計7科88種が採集されたことになる。この中には、ウラナミシジミ、アサギマダラのように迷蝶、偶産蝶として扱われるものもある。

2. 今後、浦幌で採集される可能性のある種

イ) イチモンジセセリ

Table 1では、十勝管内の採集記録がないが、食草がススキであることからも、6月中旬～8月(釧路湿原総合調査団、1977)にかけて調査する必要がある。

ロ) オナガアゲハ

十勝管内でも非常に稀な種で、Table 1でも芽

室、上士幌の記録しかないが、池田では目撃記録(笠岡、1980)がある。

ハ) ウラジロミドリシジミ

カシワ・ミズナラが食樹であり、7月～8月の調査に期待したい。

ニ) ムモンアカシジミ

前種と同じくカシワ・ミズナラを食樹としている。これも7月～8月の調査に期待したい。

3. おわりに

1981年10月に、常室川の奥深く入山したが、道路工事、植林などがかなり進められていた。人間の生活、特に産業の発展には欠くことのできない両事業ではあるが、自然との調和が保たれる開発であってほしいものだ。

ある県では、山林に害虫駆除の薬を散布することは、天敵を含めて多くの動物を殺すだけで、その後は、害虫にとって楽園を作っているにほかないとして、薬剤散布を中止し、天敵を放すこととしたという話を聞いたことがある。

自然界の調和は、すべての生物によって保たれているのであり、ごく一部のみにとらわれた発想は、何の解決にもならないことを教えてくれている。たかだか1頭のチョウであっても、それをとりまく自然は、相互に重大な要素を秘めていることを、今さらながら思い知らされた。

人間も自然界の一員である以上、人間の幸せを自然抜きで語ることは、どんな時代になんともないであろう。だとすれば、残されたわずかな自然を、人間の智恵で守ることを考えなければならぬ時代とも言える。

目 次

浦幌で採集された蝶	円子紳一	2
生剛という地名についての覚書	後藤秀彦	6

表紙写真：十勝郡生剛外ニケ村戸長役場 本村最初の戸長役場。馬の横は小沢熊太初代戸長。玄関に座っているのは渡辺書記。中央長身の人吉川一馬。左から二人目中川北松。(1901年撮影)

種名	浦幌	本別	足寄	陸別	池田	芽室	上士幌	釧路
I. セセリチョウ科								
1. チヤマダラセセリ	○	○	○	○	○		○	○
2. ミヤマセセリ	○	○	○	○	○		○	○
3. キバネセセリ	○	○	○	○	○	○	○	○
4. ギンイチモンジセセリ	(H)	○	○	○	○		○	○
5. コチャバネセセリ	○	○	○	○	○	○	○	○
6. オオチャバネセセリ	(A)	○	○	○	○	○	○	○
7. イチモンジセセリ								○
8. コキマダラセセリ	○	○	○	○	○	○	○	○
9. ヒメキマダラセセリ	(H)							○
10. カラフトタカネキマダラセセリ	○	○	○	○	○		○	○
II. アゲハチョウ科								
1. ウスバシロチョウ	○		○			○	○	○
2. ヒメウスバシロチョウ	○	○	○	○	○		○	○
3. アゲハ	○	○	○	○	○		○	○
4. キアゲハ	○	○	○	○	○	○	○	○
5. オナガアゲハ						○	○	
6. カラスアゲハ	○	○	○	○	○	○	○	○
7. ミヤマカラスアゲハ	○	○	○	○	○	○	○	○
III. シロチョウ科								
1. エゾシロチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
2. モンシロチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
3. エゾスジグロシロチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
4. スジグロシロチョウ	○		○	○	○	○	○	○
5. ツマキチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
6. ヒメシロチョウ	(M)		○		○			
7. エゾヒメシロチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
8. モンキチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
IV. タテハチョウ科								
1. アサヒヒョウモン							○	
2. ヒメカラフトヒョウモン	(A)		○	○		○	○	○
3. カラフトヒョウモン	○	○	○	○	○	○	○	○
4. ヒョウモンチョウ	(A)		○		○	○	○	○
5. コヒョウモン	(A)	○	○	○	○	○	○	○
6. ミドリヒョウモン	○	○	○	○	○	○	○	○
7. メスグロヒョウモン	○	○	○	○	○		○	○
8. オオウラギンスジヒョウモン	○	○	○	○	○	○	○	○
9. ウラギンスジヒョウモン	○	○	○	○	○	○	○	○
10. クモガタヒョウモン	○	○	○	○	○	○	○	○
11. ギンボシヒョウモン	○	○	○	○	○	○	○	○

Table I 十勝管内隣接町村蝶類分布図 (I)

種名	浦幌	本別	足寄	陸別	池田	芽室	上士幌	釧路
12. ウラギンヒョウモン	○	○	○	○	○	○	○	○
13. イチモンジチョウ	○	○	○	○	○		○	○
14. オオイチモンジ	Ⓐ	○	○	○	○	○	○	○
15. コミスジ	○	○	○	○	○	○	○	○
16. ミスジチョウ	○		○	○	○	○	○	○
17. フタスジチョウ	○	○	~○	○	○	○	○	○
18. アカマダラ	○	○	○	○	○	○	○	○
19. サカハチチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
20. クジャクチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
21. コヒオドシ	○	○	○	○	○	○	○	○
22. エルタテハ	○	○	○	○	○	○	○	○
23. キベリタテハ	○	○	○	○	○	○	○	○
24. ルリタテハ	○	○	○	○		○	○	○
25. キタテハ								△
26. シータテハ	○	○	○	○	○	○	○	○
27. ヒメアカタテハ	○	○	○	○	○	○	○	○
28. アカタテハ	○	○	○	○	○	○	○	○
29. コムラサキ	○	○	○	○	○	○	○	○
30. ヒオドシチョウ								○

V. シジミチョウ科

1. オオミドリシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
2. ジョウザンミドリシジミ	Ⓐ	○	○	○	○	○	○	○
3. エゾミドリシジミ	○	○	○	○	○		○	○
4. ハヤシミドリシジミ	○		○		○	○	○	○
5. ウラジロミドリシジミ					○	○	○	○
6. ミドリシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
7. アイノミドリシジミ	Ⓑ	○	○	○	○		○	○
8. メスアカミドリシジミ	Ⓐ	○	○	○	○	○	○	○
9. ウラキンシジミ	Ⓜ					○	○	○
10. ウラゴマダラシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
11. アカシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
12. ムモンアカシジミ		○	○	○	○		○	○
13. オナガシジミ	Ⓐ		○	○	○		○	○
14. ミズイロオナガシジミ	○	○	○	○	○		○	○
15. ウスイロオナガシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
16. ウラミスジシジミ	○		○		○		○	○
17. カラスシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
18. エゾリンゴシジミ	○	○	○	○	○		○	○
19. コツバメ	○	○	○	○	○		○	○
20. トラフシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○

Table 2 十勝管内隣接町村蝶類分布表 (II).

種名	浦幌	本別	足寄	陸別	池田	芽室	上士幌	釧路
21. ベニシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
22. ジョウザンシジミ	○		○	○	○		○	○
23. ウラナミシジミ	○							○
24. カバイロシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
25. ゴマシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
26. ルリシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
27. スギタニルリシジミ	Ⓐ	○	○		○		○	○
28. ツバメシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○
29. カラフトルリシジミ							○	○
30. イシダシジミ	○			○	○		○	○
31. ヒメシジミ	○	○	○	○	○	○	○	○

VII. ジャノメチョウ科

1. ヒメウラナミジャノメ	○	○	○	○	○	○	○	○
2. クモマベニヒカゲ							○	
3. ベニヒカゲ				○		○	○	○
4. ジャノメチョウ	○	○	○	○	○	○	○	○
5. ダイセツタカネヒカゲ							○	
6. ウラジャノメ	○	○	○	○	○	○	○	○
7. クロヒカゲ	○	○	○	○	○	○	○	○
8. シロオビヒカゲ	○	○	○	○	○	○	○	○
9. ヒメキマダラヒカゲ	○		○	○	○	○	○	○
10. サトキマダラヒカゲ	Ⓜ	○	○	○	○	○	○	○
11. ヤマキマダラヒカゲ	Ⓜ	○	○		○	○	○	○
12. オオヒカゲ	○	○	○	○	○	○	○	○

VII. マダラチョウ科

1. アサギマダラ	○							□
-----------	---	--	--	--	--	--	--	---

註： ① 浦幌の記録は、○印=円子紳一、Ⓐ印=阿部宏、Ⓜ印=松本尚志、Ⓐ印=定岡久男、Ⓐ印=阿部秀夫による。

② 本別、足寄、陸別、上士幌の記録は、松本（1975、1976）による。

③ 池田の記録は、笠井（1980）による。

④ 芽室の記録は、松本（1980）による。

⑤ 釧路の記録は、○印=飯島（1981）、△印=飯島（1973）、□印=藤岡（1975）による。

Table 3 十勝管内隣接町村蝶類分布表 (Ⅲ)

(浦幌町農業協同組合営農部)

引用参考文献

- 阿部英夫（1978）『蝶をおとつ』 浦幌
 飯島一雄（1973）「釧路湿原とその周辺の昆虫相
 　Ⅲ」『釧路市立郷土博物館々報』224
 　釧路
 ————（1981）『釧路市立郷土博物館収蔵資料
 　目録』（1） 釧路
 笠井啓成（1980）『池田町の自然・蝶類調査報告』
 　1 池田

「釧路湿原」総合調査団（1977）『釧路湿原』

釧路叢書第18巻 釧路

白水 隆（1971）『原色図鑑 日本の蝶』 東京

藤岡知夫（1972）『図説 日本の蝶』 東京

———（1975）『日本産蝶類大図鑑』 東京

牧野富太郎（1970）『牧野新日本植物図鑑』 東
 　京

松本尚志（1975）「浦幌町に於ける蝶類の分布」

『浦幌町郷土博物館報告』6 浦幌

———（1976）「カラフトタカネキマダラセセ
 　リの発見及びその採集について」『浦幌

町郷土博物館報告』7 浦幌

—— (1980) 『芽室町産蝶類ガイド』 芽室

円子紳一 (1973) 「浦幌町の蝶類レポートⅠ」『浦

幌町郷土博物館報告』2 浦幌

—— (1976) 「浦幌町郷土博物館所蔵の阿部

宏氏の標本」『浦幌町郷土博物館報告』

7 浦幌

—— (1977) 「帯富で採集したヒメキマダラ
ヒカゲ」『浦幌町郷土博物館報告』9

浦幌

—— (1979) 「東山でイシダシジミを採集」
『浦幌町郷土博物館報告』14 浦幌

—— (1980) 「アサギマダラ2頭を採集」『浦
幌町郷土博物館報告』16 浦幌

生剛という地名についての覚書

後藤秀彦

I

近年、地名に関する発言が識者の間から声高らかに叫げられている。こうした傾向は、全国的な傾向と受けとめられるが、殊に北海道では地形を基調としたアイヌ語の地名が、字名改正や新設の団地などの出現でその歴史的経過や由来を全く無視した「青葉町」だの「宝町」だの「緑阳台」だの名称を用いる傾向が強まっている。地名は一種の文化財を見る考え方が強調されている。それは「地名はあらゆる固有名詞の中でもっとも変化しにくい頑固な性質をもっている。それと同時に、時代と共に自然にあるいは作為的に変化する。地名には変わらない面と変っていく面の二面性がそなわっている。すなわち地名には時間の推移にしたがう多様性と、それを超えた同一性がみられる。」(谷川編、1978) からであろう。

この小論では、現在でも使用されている「生剛」という地名を取りあげて知れるところを記してみたいと考えている。

なお、古地名等の採集については古文書・古地図等を利用したが洩れているものも多々あると思われるので、ご教示願えれば幸甚である。

II

「生剛」とは、現浦幌町の前身、「生剛村」の戸長役場の所在したところである。現在では「生剛村市街地」は浦幌や吉野へ移転し、一面畠となつて「浦幌町発祥の地」の石碑が往時の面影の一端を窺わせるばかりである。1900年、当時の大津村から分村し、生剛の地に「生剛外二ヶ村戸長役場」が設置され行政事務を執り始めたことをもって浦

幌町の開基としているが、この「セイゴウ」と発音される地名の原義については諸先学の間に異論はなかったものの、その由来については積極的な分析をすすめる者がいなかったのが実情であった。

「生剛」は、現在では誰もが何の抵抗もなく「セイゴウ」と発音しているが、本来はアイヌ語地名の「オペッカウシ」であり、それに「生剛」の漢字があてはめられ、それが次第に「セイゴウ」と音読され、慣例化していったものである。

オペッカウシとはアイヌ語で〔O-pet-で〔尻を・川・の岸に・くっつけている者〕の意味である。これを、永川方正(1891)は「川岸」と訳し、生剛村の原名としている。また、知里真志保(1956)は、川岸が高い岡になって続いている所。〔〔O (尻、陰部) pet (川) ka (上、=岸) usi (につけている)-i (者)、——尻(陰部)〕を川岸に突き出している者、と考察している。

こうした地形をもつ川と丘の関係は北海道内各所にあるが、現に札幌の三角山が琴似川と接している地点も同様に呼ばれていた。しかし、現在の生剛地区にはそういう地形に相当する地形はなく、この地名がいずれかの時期にいずれかの地点から移転したものと考えられるが、この点について古文書等からオペッカウシに関する地名を採集し、検討を加えてみたい。

III

浦幌町にかかる地名は、江戸時代中期頃からの古文書に散見される。それらの多くは、太平洋岸に点在するものであるが、中には松浦武四郎の一連の紀行のように十勝川沿岸に及ぶものもある。